

新潮文庫

お吟さま

今東光著



新潮社

お 吟 さ ま



定 価 7 0 円

新 潮 文 庫

昭和三十五年十一月三十日 発行
昭和四十一年六月二十日 九刷

著 者 今 東 光

発 行 者 東京都新宿区矢来町七一
佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新 潮 社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京二六〇局二二一(大代)
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・図書印刷株式会社 製本・憲專堂製本所

© Printed in Japan

新潮文庫

お 吟 さ ま

今 東 光 著



新潮社版

1439

お
吟
さ
ま

そ の 一

お三人目だから、お三さまとお呼び申しておりますが、お小さいときにはお亀さまと申上げましたそうで。

お吟さまと申上げますが、女は氏あって名が無いのでござりますから、家方ではお三さままで通つて居りました。

御主人のお吟さまとは御同年でござりましたので、河内国若江郡の沼べりの村から、はるばると御奉公にあげりましたときは、誰しものように泣き明した夜もござりましたが、お吟さまづきとなつて朝夕かきずき、お給仕やら、御召換えやら、御入浴と御介添え致しますうちに、御むつび合う御間柄となつて、お次の間に休ませて頂くほど御不憫を御かけ下され、いつとなく御心のたけなど御打ち明け遊ばされるほどになりました。まことに不思議な仕合せでござりまして、平戸渡りの瑤瑠の櫛やら簪やら、見たこともない御頭の御飾り物から、美しい御小袖、金糸銀糸で縫取りした御帯など鷹揚にたまわり、泣き明した夜のことなど遠い夢のように忘れて仕舞つたことでござります。

秋の夜更けなど間の御襖を閉めさせたまわず、夜のふけるおもしろさに何時までも御寝遊はさ

れず、生国の御物語を御せがみなされ、間近に聳える生駒山の山裾にひろがる河内野を、うねうねと蛇のようにうねり曲って流れる大和川という大河と、それに添うて数えきれぬほどの沼やら池やら、その間に点綴^{てんてつ}する村々の、とりわけて古の歌垣にもくらべられる夏の夜の踊りのおもしろさ。

『その唄を聞かせてたもれ』

と御せめ遊ばし、枕にうつぶせになって低い声して

人と契らば

浅くちぎりて

末とげよ

もみじ葉を見よ

濃^こきがまず散る

ものに候

と歌ってお聞かせ申しますと、ほとほと御感心遊ばされ

『河内者は情知りよの』

と仰せられたのであります。その御言葉がいかに感に堪えて聞えましたので、はっとしてお

吟さまのお顔を御見あげ申しますと、短檠の灯影に背らを御むけなされましたが、ありありとお顔をお染め遊ばしたかにうかがえたのでござります。それからは一入お情を蒙りましてござります。

朋輩の大方は泉州生れが多うござりましたが、河内者も少くはござりませんで、いちばん年若なところから御不憫がかりましたものでござりましょうか。

屹としたことは存じませぬが、大宗匠様の御母堂とやはら、遣明船の末吉丸とか申す大きな御舟を御所持なされた河内国平野郷の末吉様から御興入れ遊ばされた由に承ってござります。平野郷では末吉家やら御一族の成安家やら大分限者でござりまして大宗匠様の御舎弟にあたらせられる宗巴様の御娘も成安家の道慶（桂）様の、いずれは嫁御寮との御約束とか洩れ承ってござります。御当家と河内との御因縁の深いのは、あらましこのような次第でござります。それゆえ奉公人も殊のほか河内者を召し寄せられる趣きに承ってござります。隣国との深い御誼みは、ただ格式とか、氏素姓とか、財宝の多寡ばかりでござりませぬそうな。永祿の頃とか承りましたが、御上洛遊ばした織田様から堺津へ対して、何でも難しい儀を御持ちかけ遊ばされ、御会合三十六人衆や、納屋十人衆など頭立たせられた御方々も、二万貫文の矢銭とやらに御運も尽き果てたと思召され、櫓を築き、堀を深うし、菱の実をまいて御合戦の御用意のとき、女子供の足弱はともかくも河内国に落し参らせたそうにござります。その代り生駒山の峯つづき、信貴の御城にこもられた松永弾正様の御合戦の砌りには、さしずめ河内野が御合戦場と相成りましたので、河内の

御親戚が和泉へ立ち越えて、御当家へも御避難あそばされたかに承ってござりまする。これも戦国のならいでござりましょうか。

河内国は御存じのごとくに海と申すものがござりませぬ。わたくしなども沼よりほかには見も知らぬ村落に生い立ちましてござりまするので、深野ノ池など世の中にこれほど大きな池は他にあるまいものと存じてござりました。それが御当家に召し使われましてからは、潮干狩やら住吉詣やらと、果てしも知らぬ海原というものを見せて頂きましたこととござりまする。井戸の中の蛙という譬えがござりまするが、まこと河内野の青蛙が海を見たのでござりまするので、ただ驚きあきれるばかりでござりました。とりわけ御親族の納屋衆の御一方と承りましたルソン助左衛門様と仰せられる御方様が、遠い南の海を越えてルソン島（フィリッピン群島）から堺津へお帰り遊ばしました時と、エスパニヤの南蛮船がこの港へ入った折のことは忘れることが出来ませぬ。ともに大砲を打ち鳴らし、華やかな御上陸なされるのを、大勢の人々と共に櫺子窓から垣間見たこととござりました。

南蛮船のカピタン様と仰せられる船長は、御会所の御招きの後、御当家の茶湯に招じられて御越しなされました。背の高さは六尺有余もござりましょうか。白磁のような白い肌をされ、お頭の赤毛は御仏のように縮れて、御鼻は曲った鉤鼻で、御眼の玉はビードロのように青く澄んで凝つと見つめられると身がすくむように存ぜられました。それが黒羅紗の異様な御服装にモールが燦然と輝き、シャポーという冠り物を召されました。御書院に御通りなされ、御長持に緋毛氈を

かけたのへ御腰をかけられ、人の生血いけちのような赤い御酒ごしゅを下されましたが、お吟さまは大層御意に召した御様子でギヤマンの高坏つぎでなみなみ一杯召しあがられましてござります。わたくしにもと一杯、頂戴ちやうだいいたしました。河内では孕み女に鯉はらの生血を吞ませますが、その生臭い匂いを感じ出しますと、何やら胸がつかえて御遠慮つかまつりましてござります。

これは後のお話でござりますが右大臣信長様は、この鳥毛のついた冠り物を召されて、御馬揃いに綺羅きらを飾られました。それで、太閤様もこの生血のような御酒をいたく御たしなまれ、御珍重遊ばされた由に承ってござります。

総別、南蛮の御方はお女中を御大切にもてなされ、杏脱石くわんめいしから御縁側にお運びのときなど、わざわざ御手をかけられて御介添えなされます。わたくしごととき召使の者さえ、御腕をお貸し下され、耳の付け根まで赤うなりましたこと。河内の親など南蛮人と腕を組んでいる姿など見ましたなら、さだめし氣を失うこと。でござりましょう。堺津ならでは見られぬ風情と思召し下されませ。

お吟さまも御家柄、御数寄すきの道にかしこく、こういう時などカピタン様の御所望もだしがたく御点前おてまえを遊ばされました。お女中の御点前など茶湯では見聞きも致しませぬことながら、お女中を上座に据えられる御国振りの御風俗とて、この時に限って、御母君の宗恩様御介添え、御父君の大宗匠様の御差図によりまして、見事な御点前でござりました。カピタン様御帰館の後、大宗匠様の御言葉として

『数寄と風流の道には老若男女の別あつてはならぬもの。吾われより後の人は、女点前おんなてまえを考えのうて

はならぬ喃^{なん}』

と仰せがござりました。わたくしなど数寄の道は合点が参りませぬが、お吟さまの御優美な御点前を拝見いたしましたして、女ほど御点前はしおらしく、柔しく、美しく存ぜられましたことござります。

もとよりカピタン様には御茶席の書軸や香炉や釜など、いかほど天下の名器をととのえばとて存じ寄りもござりませぬ。御当家御秘蔵の珠光青磁^{しゅこうせいじ}の御茶碗でと存じて居りましたところ、大宗匠様の御肝入り^{おんきんまり}で、今焼の織部様御手造りの御茶碗を御用意遊ばされたのが、いたくカピタン様の御意にかない、そのまま御土産としておもたせなされました。これは黒織部の大振りの御茶碗にクルス（十字架）が白抜きに現われて居るものでござりました。いかさまきびきびとした御あしらいと存じ、流石^{さすが}に三千石の天下の御茶道と感じ入ったことござります。

御承知のごとく大宗匠様には御先妻様がありでござりました。公方様の御相伴衆^{おじょうばんしゅう}で、五畿内を御独りで御治めになられた三好修理大夫^{すりのだいら}長慶様の御息女で、度々の御合戦に堺津へ御成り遊ばすうち、大宗匠様を御見込みで御息女を御内儀となされたとの御噂でござります。この御腹に紹安^{せうあん}さま即ち道安さまが御生れになったことは御案内の通りでござります。斯様なことも、もとはと申さば大宗匠様と実休様とが紹鷗宗匠^{じょうおう}と御同門の因縁でござりましょうか。筑前守様（長基）の御次男の実休様は、御兄君の長慶様の御命にて泉州の岸和田城におわしましたが、堺津の南荘にも御別邸がありまして、大宗匠様とは格別の御昵懇^{びじこん}の御間柄であられ、されば御兄君の長慶様

御息女を御とりもち遊ばされたやに承って居ります。はからずも実休様は畠山様との御合戦に、久米田に御陣取りの折柄、流れ矢に傷付いて御かくれになりました。まだ御壮年の砌りで。

御舎弟を御失い遊ばされ、憑みに思召す御一子の義興様が暴かに御他界遊ばされ、人の御噂には流石に剛気の長慶様も茫然となられ、終日、御もの言いも少く御なり遊ばされて、これまた殿方の御厄年に御他界遊ばされたことでござります。よしなき人の口の端は、義興様に松永弾正大弼様が御毒を盛られたなどと、あらぬ噂を囁き散らしたことでござりましたが、まことに義興様の御夭折こそ長慶様の御命を締め参らせたかと存じられます。

長慶様並に実休様御他界の後、次第に御夫婦の御仲よろしからず、長らく御別居の後に、御内儀は御当家から御生国の阿波国へ御移り遊ばされたそうで。海をへだてて四国におわします御母堂への道安様の思慕の情は並ならぬもののように存ぜられますことでござります。思いなしか大宗匠様と道安様とは御氣質ばかりでなく、しっくりせぬように伺えるのでござりますが、これは僻目かと存ぜられます。

今の御内儀は、大宗匠様の御意に召した御方様だけに、まことに申し分のない御主人様で、御奉公するわたくしどもまで影ながら御褒め申さぬはないほどでござります。御身は御大名の御息女に御生れながら、誰にもへりくだって御あしらい遊ばされ、天下の御指南様の御内方として、これほど行きとどいた御方様は先ずあるまいと存ぜられます。御当地の猿樂大夫宮尾道三様の御娘でおわします。

御存知のごとく猿樂法師は、大和春日社の四座、近江日吉社の三座をはじめ、京など手猿てまぐ樂がもてはやされましたが、堺津も富裕な土地柄とて、宮尾一座がござりました。その頃、大和と河内の国境、信貴山に御城を御構えなされた彈正久秀様は、茶湯は紹鸕しやう宗匠に御稽古でござりましたので、従いまして宮尾の猿樂一座をも御晶眞あそばされ、道三大夫どうさんたふの御娘に御手がついて御仲に御子二人もうけられてござります。久秀様は京畿に御威勢を振うて居られましたが、織田様へ御降参遊ばされ、そのまま大和河内の御太守として以前に変わぬ御羽振りでござりましたが、御運の尽きましたものか、程なく織田様に対して御謀反遊おんむはんばされ、多聞城たもんも落ち、やがて信貴山城へ御籠城ごろうじやうの御羽目と相成りました。それでも始めのころはひそかに堺津へ御便りなどもござりましたそうですが、十重二十重とえはたえに囲まれてからは蟻の這い出るすきもなく、宮尾一座は笛も太鼓も鳴らぬ日がつづいたと申されます。織田様の攻め振りが御手ぬるいという噂が立ちましたのは、もとより彈正様の御武勇もさることながら、彈正様御秘藏ひかくの平蜘蛛の釜に織田様御執心で、さればゆるゆると御命乞にひきかえて、この御釜を召されよう思召しとの御尊でござりました。松永様もよくよく惜しみ給うたとみえまして、平蜘蛛の釜と御自分の御首は未来永劫えいけつ、信長殿の見参けんさんにいれまいと仰せられ、御落城の砌り、この釜を微塵みじんに打ち砕かれ、御首と共に火薬で粉々に焼き碎いて、御一族もろとも御滅亡遊ばされたのでござります。

その御嘆きも薄らいだ頃、大宗匠様といつしかわらない御仲だったなどと、口さがない御尊を立てられましたほどで、大宗匠様の二度目の御内儀として千家へ御興入れ遊ばされたのでござり

ます。それほど御二人の御仲は、はたの眼にも御睦まじゅうござりました。

御内儀は彈正様の御二人の御子連れ子になされ、大工匠様も恰ら御自分の御子のように慈しまれたのでござります。まことに如何なる御月日の御生れか、生さぬ御仲の父君ながら、産の親にもましての御可愛がりように、この御子は虫気もなく御育ち遊ばされたと申します。左様の次第で、上の男の御子様の道安様とは御同年でござりました。宗淳様（少庵）のことでござります。御幼名を吉兵衛様と申上げ、御元服の後に四郎左衛門と申されました。御妹様がお吟さまでござります。これで御わかりのごとお吟さまは五畿七道に人も恐れた松永彈正大弼様の御胤で、御幼名をお亀様と申上げました由ですが、わたくしどもはお三さまと申上げて居ります。

かようなことは誰が語るともなく人の知るところでござりまして、堺津では誰知らぬものものなのでござりまするが、おかしなことは道安さまと少庵さまとの御氣質の違いが、御出生を疑いたくなるほどで、そこからまこと嘘ごとが入り混って来るのでござります。と申しますのは道安さまの方は御性質が荒々しく、従いまして茶湯御稽古も凄じい氣魄で、諸事強い御好みでござります。それゆえに、もしかすると彈正様の御胤は道安さまの方ではないかと思ひ惑うほどでござりました。それにひきかえて少庵さまの御性格は、お女中にも見まごうほど柔しく、平生も物靜かにいらせられ、茶湯の御稽古の後は、笛や鼓を遊ばされて、お吟さまともっばら遊芸三昧に親しまれ、これがあの鬼より恐ろしい公方様殺しの張本人の御胤であろうかと疑うほどでござります。それゆえに出入の衆まで、このような間違ひを人様にも語るものとみえまして、御当地の人

の中には左様に心得て居るのもござりまする。大宗匠様の佗わび茶の御好みから申しますれば、あるいは少庵さまの茶湯の方が法にかのうて居たのでござりましょうか。

ある時、大宗匠様が京より堺へ御戻り遊ばされ、御内儀の宗恩様と久々振りにお語らいの後、さて申されるには

『御殿にて石田治部少輔殿じぶろうすけが、わざわざわしを物かげに呼ばれ、お吟を万代屋もずやにやってくれ、折入おれいって頼むと仰せられた。口吻くちふによれば宗安は、かねてからお吟を恋慕うていたそうだが、わしの許で茶湯稽古をしながら、素振りにも、まして口の端にも物ほせなかった。他ならぬ利きけ者の治部殿の肝入りじゃ。情なげのう断りもなるまい。そなたの意見を聞かせてたもれ』

『御意のままに』

と宗恩様は仰せられたきりだったと申しまする。

太閤様御前で万事を切り盛りする石田治部三成様の御威光には、徳川内府様さえ御遠慮あったと申すほどでござりました。その治部様の御声がかりと申し、まして万代屋宗安様は御家柄といひ、茶湯の高弟といい、申し分ない御縁と思召されたのでござりましょうか。お話はとんとんと運んで、お吟さまはいよいよ万代屋へ御興入れと話が進んだのでござりまする。

それからというものは、わたくしなどまるで何やら華やかな夢見心地と申すもので、御婚禮の御支度に御当家は色めき立ったのでござりまする。

豪華な色小袖が染めあがって来る度毎に、それを縫うもの。縫いあがるとそれをお吟さまに一

度お着せ申すもの。絢爛けんらんな帯が出来あがると、また大騒ぎして、この帯はあの小袖に、あの帯はこの小袖にと、これまたひと騒ぎでござりました。そういう中でお吟さまだけは日毎、お痩せになるように御見受けいたしましたしてござりまする。何か御氣にむかぬものがあると、これは朝夕かしく眼に狂いはなく、わたくしは夜分ひそかにお質なまねいたしますと

『ちっとも楽しゆうない』

とだけ仰せられて、はらはらと御涙を流されたのでござりまする。

『万代屋様へ御輿入れが御厭でござりまするのかえ』

と伺うと

『宗安様が嫌いというのではなけれど……』

と後は貝が蓋ふたをしたように仰せがなく、ただ御むずかり遊ばすのでござりまする。御乳母おめのとも、その他の御つきの女達も、漸よやくお吟さまの御様子ごようすが、ただならぬものと見えながら、日毎に進む御婚儀の御支度にとりまぎれて、お吟さまの御心底をおたずねする折もなかったのでござりまする。そういう御混雑の最中、お吟さまはある夜、わたくしの枕もとにお忍びなされ

『明日この手紙をひそかに御とどけ呉りやれ』

と思ひ迫った御声おんこゑ音で仰せられたのでござりまする。わたくしは何やら胸が早鐘を打つ想いのま

『御とどけ先は』